

見えない戦争

熊谷 博子

週刊プレイボーイ 1991年4月2日 掲載

世界の難民の4割を生んだアフガン戦争
後遺症深い、国境地帯に行く

撤退完了から2年、いまだ続く
見えない戦争。



きびしい報道規制や検閲の中で、私たちは湾岸戦争を見た気になっていた。でも果たしてあれが戦争の真の姿だったのか。

2年前、ソ連軍がアフガニスタンから撤退を完了した時、これで平和になると喜んだ。

しかし、今、国境地帯を行くと、戦争の情容赦のない傷跡にぶつかる。慢性的な死がじわじわと難民の子供たちに訪れ、500万個の地雷は地中だ。見えない戦争は続き、同じことは次に湾岸を襲う。

湾岸戦争は一応の“終結”を見た。かつて世界を驚かせたもう一つの「侵攻」、ソ連軍のアフガニスタン侵攻も、約10年後、1989年2月15日の撤退完了で、戦争は終わったかのように見えた。でも私は、パキスタンのペシャワールの町から、絶望して戻ってきた。

ペシャワールとはアフガニスタン国境に近く、サンスクリット語で「花の都」の意味だ。紀元前から栄えたシルクロードの要地である。ところが、今や100万人以上のアフガン難民がなだれ込み、2人に1人は難民だ。「難民の都」と化してしまった。

撤退以降も、アフガニスタン政府軍対ムジャヒディン（アフガン・ゲリラ）という形で、内戦が続いている。今、パキスタンに320万人、イランに230万人のアフガン難民がいる。湾岸



戦争で難民の数は変わったが、これは、世界の難民の4割近くを占めていた。

アフガン難民の女たちが、一生に産む子供の数は平均7～8人。あるキャンプでは、13人という数字もある。むろん、すべてが生き残るわけではない。男の戦士が必要な、まだ産めよ増やせよの時代なのだ。ユニセフ（国連児童基金）が女たちの教育プロジェクトを考えたら、女たちを教育するなんてブツ殺してやると、男たちから脅しがかかった。

ファミリー・プランニング（家族計画）という言葉は禁句だ。実際に計画していたアフガン人ドクターが、2人殺された。家から病院の途中で乱射されたのだ。

そして難民の子供たちに慢性的な死が訪れていた。小児病院で、アフガン人ドクターが手招きをした。

「見てごらん、4ヵ月だっていうのに、こんなに小さいんだよ」

10代の母親がただ立っていた。赤ん坊の衣服をめくった時、私はうっと息をのんだ。パンパンにふくらんだ黄土色のおなかに、しわだらけの細い脚。エチオピアの飢えている子供たちとも違う。食料はあるのに、栄養失調と下痢だ。しわしわの赤ん坊たちが、それから何人も続いた。粉ミルクが原因だという。母乳が出なくなったり、日本の各ミルク会社の売り込みが激しい。金があればいいが、ないから、薄いお湯のようなミルクを飲ませることとなる。戦争さえなければ、貧しくとも故郷の村で、自給自足の素朴な生活が送れたのだろう。

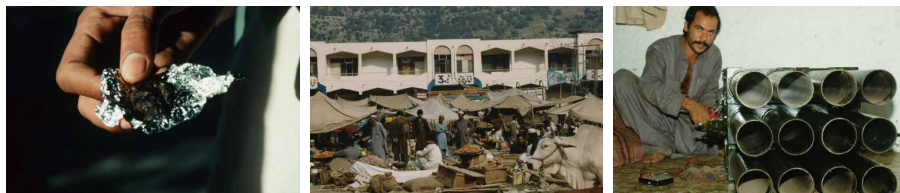


病室には、幼い腸チフスの子供たちや、脱水症状で頭の柔らかい部分に針を刺し、点滴を受けている赤ん坊たちが、母親とともにいた。中にはあと数時間で死ぬ赤ん坊もいた。

それでも、病院に子供達を連れてこられる母親たちはまだ幸せだ。アフガニスタンの国内には、国境を越え、遠い病院に来られない女、子供、老人たちがたく

さんいる。そこでは“見えない戦争”が、じわじわと進行している。推定300～500万個の地雷も埋まったままだ。誰の目にも触れないこの戦争の犠牲者たちが、いつかものすごい数になるかもしれない、と思う。

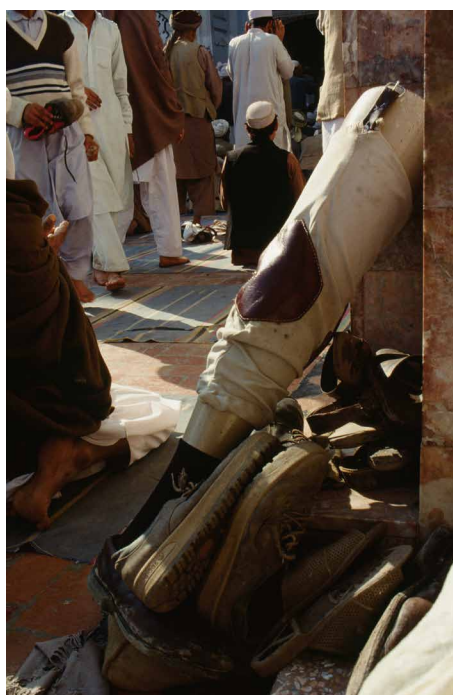
そして湾岸戦争も、“見えない戦争”が始まるのは、これからだ。



アフガニスタンとの国境地帯にある、パキスタンの村・ダラ。谷間の意味だ。ここでは、イギリス占領時代の昔から、武器を作って生きてきた。鉄や木、石をたたき、削り、全てハンドメイドだ。アメリカ、ソ連、中国、世界中の武器をコピーし、たちどころに、メイド・イン・ダラの武器ができあがる。以前は、観光客相手に銃の試し撃ちなどをやっていたが、アフガン戦争勃発後、立入禁止の最も危険な場所になってしまった。武器の他に、ハッシシや生アヘン（写真左）もある。このあたりはパキスタン国内とはいえ、政府の支配のおよばない部族の自治区だ。両国にまたがって住むバシュトゥーン人の中でも、ダラのアフリディ族は、勇猛果敢だと他から恐れられている。ムジャヒディンたちはむろんのこと、カシミールのゲリラも、イランからも買ってくる。



ムジャヒディンどうしの内紛も長く続いたが、アフガニスタン国内で戦っている司令官マスードが最近パキスタン側を訪ね、大同団結をはかる動きもあった。



ペシャワールの旧市街にある古いモスク。イスラム教徒にとって一番大事な金曜正午の祈りだ。入口に義足が立てかけてあった。男は祈り終わると立ち上がり、片足でピョンピョン飛んできた。

その日、私は川辺で夕陽が沈むのを見ていた。松葉杖の男が1人どこからともなく現れ、2人、3人と増えていった。

「近くのドイツ系の病院にもっといい義足をつけてもらいに来た。そしたらまたジハード（聖戦）に行くつもりだ」と、皆、疲れた顔で言う（写真下）。

あまりにも至るところにある戦争の傷跡に、人々が慣れすぎるのがこわい。





ベシャワールの近郊だけで、約350の難民キャンプがある。ほんの数年前まで外国人がカメラを向けると、レンズを銃口と間違えておびえたのだという。10年以上続いた戦争の中で、キャンプで生まれ育つ、祖国を知らない子供たちも増えてきた。パキスタンにいる難民の数は320万と言われるが、それは登録数で、実際は450万人という。



キャンプ内の診療所で、女だけの治療日。若い母親は、じっと遠くを見つめて笑わなかった帰国を希望する難民たちに、今、国連が教えているのが、地雷探知と除去のやり方だ。昨年7月からの半年間で、約65,000人が故郷へ帰ったという。